

学 位 論 文 要 旨

氏 名 勝浦 美和

題 目 幼児用自尊感情尺度の開発と保育実践への応用

学位論文要旨（和文2,000字又は英文1,000語程度）

本研究では、自尊感情を「ありのままの自分でよいと感じ、主体的に行動しようとする際の意欲を支える感情」と定義し、保育者が日々の生活から幼児のありのままの姿を気軽に確認することができ、自尊感情を育む保育実践の教育効果測定指標となる信頼性、妥当性の検討された幼児用自尊感情尺度の開発を行うことを目的とした。また、幼児や保育者の実態から自尊感情を育む保育における留意事項を作成し、完成した尺度と併用しながら保育実践に教育的介入を行い、教育効果測定指標としての応用可能性を実証するとともに、保育者の取り組みの変化を質的に検証し、効果的な介入内容について検討することを目的とした。

第1章では、自尊感情の定義と日本における子どもの自尊感情研究、現在確認されている幼児用自尊感情尺度を概観した。結果として、幼児用自尊感情尺度の開発においては、幼児の自己評価の困難性から、他者評価式が望ましいこと、使用者である保育者を念頭におき、所要時間が短く、日頃の幼児の姿が確認できる文言を用いて作成すること、信頼性と妥当性の検討を行うことが重要であることが示された。また、保育実践での使用を目的とするため、使用の際は、単に自尊感情の高低について議論するのではなく、自尊感情を育む保育をどのように行うべきかという観点で捉え、保育の振り返りとして使用する姿勢を大切にすることが明らかになった。

第2章では、開発の前段階として、保育現場における事例分析から、幼児の自尊感情が育つと思われる場面について確認した。その中で、幼児同士のやりとりにおける葛藤経験や共感できる友達や保育者の支えなどが自尊感情の育ちと関連していることや、保護者の自尊感情との関連が示された。次に、保育者のもつ自尊感情イメージと保育態度の関連について、PAC分析を用いて調査した。その結果、自尊感情のイメージは、〈認められる〉という共通のイメージと個人的特性や立場と関連したイメージがあり、それらが保育態度に繋がっていた。さらに、4,5歳児の保護者と保育者から自尊感情が高い子どもイメージを収集し、547の回答記述から「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」との関連を調査した。両者が共通して自尊感情が高いと感じる子どもは、主体性と社会性の両面をもっていることが明らかになった。

また、保護者は、成長と関連させて、保育者は、集団の中で幼児の自尊感情の高さを捉えていた。そして、全てが「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に対応する部分を有していた。

次に、先の調査で得られた547の回答記述をもとに、因子分析を用いて尺度項目を作成した。使用者にとっての分かりやすさを重視し、試作版38項目、仮尺度21項目を経て、4,5歳児を保育する保育者45人を対象に調査を行い、2因子10項目（第1因子：自己信頼・主体性、第2因子：協調性・達成意欲）を他者評価式幼児用自尊感情尺度（保育者版）とした。 α 係数は、第1因子 .87, 第2因子 .80, 尺度全体 .84であり、十分な内的整合性が確認された。また、信頼性、妥当性については、再現性調査は、第1因子.72, 第2因子.65, 尺度全体.68 であり、本尺度の安定性が確認された。確認的因子分析では、GFI .96 , CFI .98 , RMSEA .07の値が得られ、モデルの妥当性が示された。さらに、尺度による評定の低群, 高群各20人に対して担任外の保育者評定を行った。各評定の高群と低群の平均値に有意差が見られたため、基準関連妥当性が確認された（第1因子： $(t(38)=4.34, p<.001)$, 第2因子： $(t(38)=5.16, p<.001)$ ）。

第3章では、介入内容の異なる教育群A, Bと対照群を設定し、本研究で得られた「自尊感情を育む保育における留意事項」と本尺度を用いて6月, 8月, 12月に教育的介入を行った。教育群Aでは、個別インタビュー、教育群Bでは個別インタビューと8月と12月に園内研修を実施し、本尺度の教育効果測定指標としての応用可能性と、効果的な介入内容について検討した。結果として、教育群Aは、両因子において6月から8月に、教育群Bでは、第1因子は、8月から12月に、第2因子は両時期における有意差が見られ、インタビューと園内研修の質的分析から、効果的な介入内容としては、園内研修が有効であることが示された。また、本尺度が、自尊感情を育む保育における教育効果測定指標として使用可能であることが証明された。

本研究により、作成した幼児用自尊感情尺度は、自尊感情を育む保育実践を行う際の教育効果測定指標として有効であることが確認された。本尺度を用いることにより、毎日の生活や遊びの中でポイントを絞って幼児の姿を捉えることが容易になるとともに、共通の項目を用いて保護者や他保育者と対話を重ねることで、保育の省察に役立てたり、多面的な幼児の姿の読み取りに繋がったりすることが可能になると考えられる。